瀬戸口望コレクションの紹介３
～志布志市倉園Ｂ遺跡～

黒　川　忠　広

はじめに

当館では，瀬戸口望コレクションの資料化に取り組んでいる。60カ所近い遺跡資料の内，平成29年度は坂之上遺跡，30年度は井手平遺跡を資料化してきた。今年度は，志布志市倉園Ｂ遺跡を紹介する。なお，瀬戸口氏の業績やコレクションの概要等については，拙稿（黒川2018）等を参照されたい。

１　倉園Ｂ遺跡資料の紹介

（１）遺跡の概要

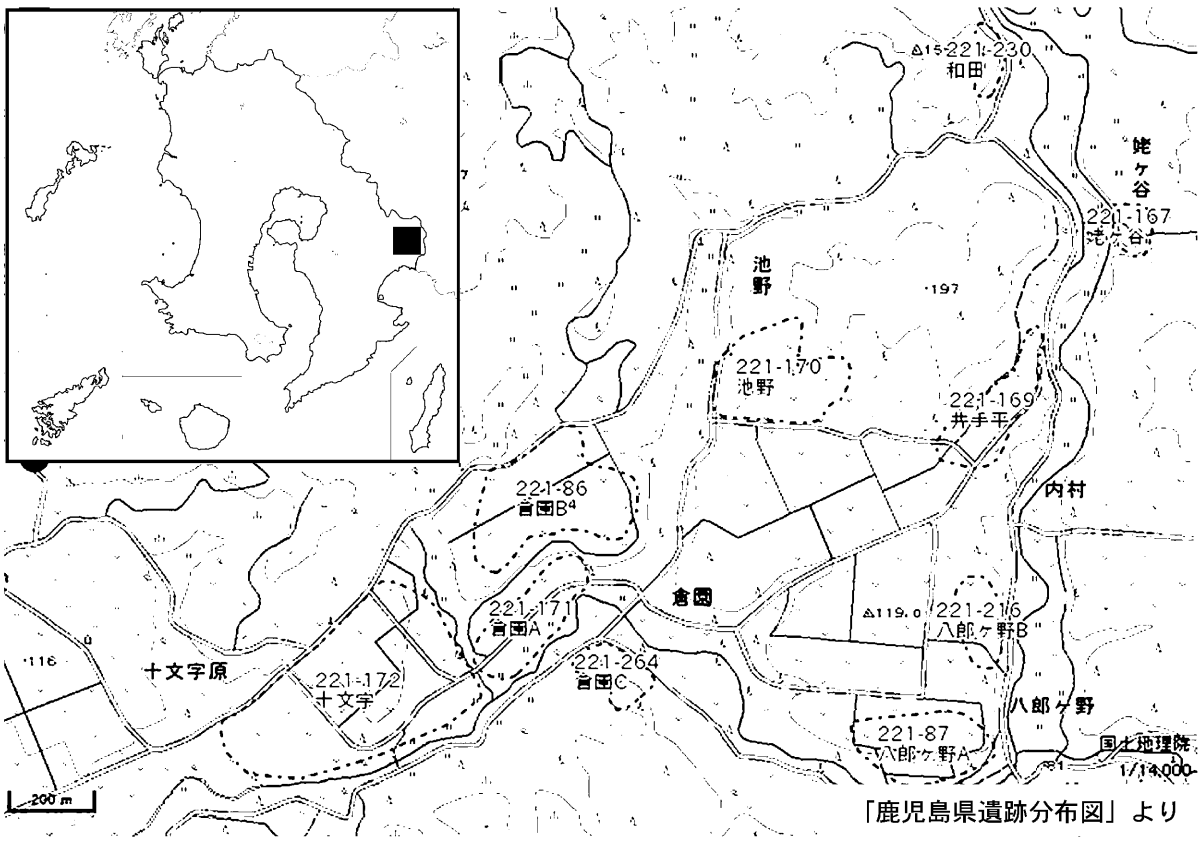
倉園Ｂ遺跡は，志布志市志布志町内之倉に所在する。昭和57（1982）年に確認調査が，昭和58（1983）年に本調査が実施された。

遺跡の立地は，「267m峯より南に張り出すこの台地は南の足下を前川が東から西方向に流れ，両脇を深い谷沢によって隣り台地と分断され，その比高は十数mある。中央部の標高で120.4mを測り，四方に向って緩斜面をなしている」とまとめられている（志布志町教育委員会1985）。なお，発掘調査に際しては，集石の剥ぎ取りが行われ，現在，志布志市埋蔵文化財センター入口に展示されている。

（２）調査成果の概要

倉園Ｂ遺跡の発掘調査成果は，その後の南九州縄文時代早期研究に多大な影響を与えることとなった。そのうちの２点を紹介しておきたい。

１つ目は，土坑の内，Ａタイプとされたものは，後に燻製調理の施設（瀬戸口1987）の可能性が指摘され，南九州の縄文時代観や土坑の用途について研究が大きく動くきっかけとなった点である。発掘調査の調査手法も，研究の成果や様々な仮説を検証すべく，断ち割りやスライス，または，様々な科学分



「鹿児島県遺跡分布図」より

第１図　倉園Ｂ遺跡の位置

析の導入とその検証・深化へともつながった。

２つ目は土器論である。この遺跡で出土した資料の一部が，吉田式土器から石坂式土器への型式変化が追えることなどから，新東晃一氏によって倉園Ｂ式土器と命名された（新東1989）。また，前迫亮一氏は，報告書刊行後に接合し土器の様相のわかった資料を紹介し，遺跡の実態解明を探る取り組みを行いつつ型式概念を整理した（前迫1993）。これらによって倉園Ｂ式土器の概念は，口縁部が外反し，文様は口縁部に横位の貝殻刺突文をめぐらせ，胴部は横位に近い貝殻条痕文を施す，と要約出来た。

なお，石器では，石鏃が「黒燿石やチャート剥片がまとまった範囲内に散布し，石鏃が多量に検出」されたという特徴が指摘された（瀬戸口1984）。磨石や石皿が狩猟具よりも多く出土する傾向が高い当該地域において，狩猟具生産について一石を投じている。

（３）資料報告

資料は，土器片167点，礫１点の合計168点を数える。土器を時代別に分類すると，縄文時代早期119点，縄文時代晩期７点，不明42点である。これらを器形や文様の特徴から分類するにあたっては，発掘調査報告に準拠し，これらに該当しないものは，適宜その他として報告を進めていきたい。

１～７は，報告書分類でⅨ類に属する。100点を確認した。１は，口縁部はほぼ直行し上端にわずかな平坦面を有する。口縁部文様は，貝殻刺突文を斜位に施し，胴部は横位の貝殻条痕文である。２は，口縁部の上端と外側へ貝殻刺突文を施す。３は，口縁部上端に深いキザミを施し，胴部は斜位の貝殻条痕文が施される。４は，口縁部上端に深いキザミを有するが，施文具は貝殻によるもので，貝殻刺突文である。内面には工具痕が斜位に連続しており，工具痕の幅は約１センチである。５は，胴部片で貝殻条痕文が斜位に施されている。６は，わずかに底部を有する。７は，底部片である。底部外径を復元すると8.4センチで，底盤が胴部と比べてやや薄い印象を受ける。

８～11は，報告書分類Ⅷｂ類に属する。４点確認した。８は，口縁部に横位貝殻刺突文を３条めぐらせ，その下位に斜位の貝殻刺突文が施される。９は，口縁部がやや外反し，口唇部は平坦でキザミを有する。口縁部には肋２条の貝殻刺突文が２段巡らされている。工具の刺突角度が緩やかであり，押圧とも取れる。10は，口縁部上端を欠損する。わずかに横位の貝殻刺突文が観察されるため，本来は，口縁部文様帯として横位の貝殻刺突文が巡っていたものと思われる。その下位には深い縦位の貝殻刺突文が巡らされる。胴部は貝殻押引文である。11は，胴部片である。密な貝殻刺突文であるが，貝殻押引文の影響が濃い。

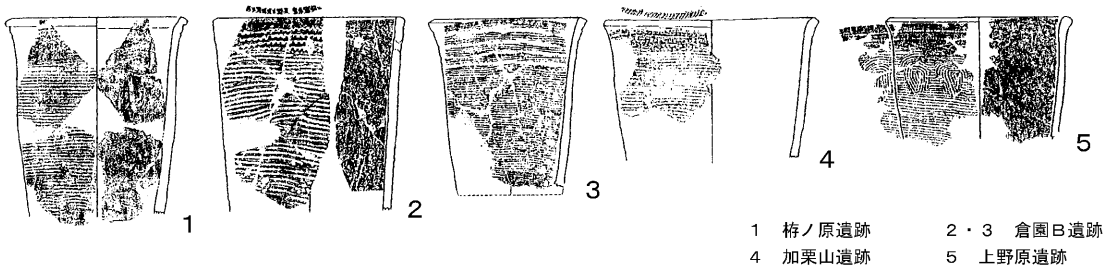
12と13は，報告書分類Ⅰ類に属する。５点確認した。12は，口縁部上端を欠損しているが，口縁部は外反する。上端部は欠損により不明だが，貝殻刺突文を羽状に施す。13は，貝殻条痕文を綾杉状に施す。

14・15は報告書分類Ⅲ類に属する。７点確認した。14は，口縁部が外反し，文様は，口縁部では貝殻刺突文を横位弧状に施文し，胴部は，これが縦位に間隔をやや開けて連続する。内面は，やや強いケズリであるが，器面の剥落が激しく，全体像はつかみづらい。円穿孔の補修孔がある。15は，風化が激しいが，胴部片として捉えた。外面に貝殻刺突文が施されている。

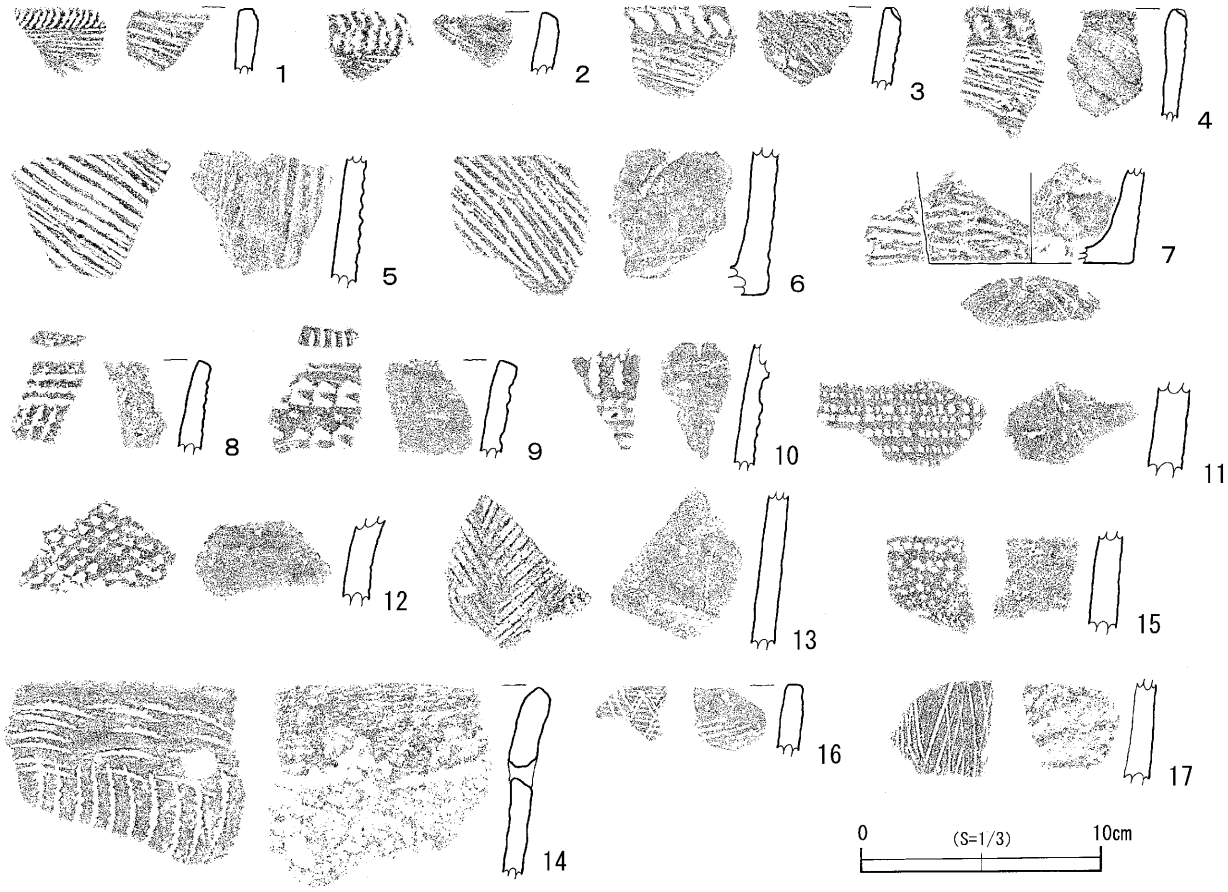
16・17は報告書分類其の他に属する。３点確認した。16は，口縁部片である。横位の貝殻条痕文の後に鋸歯状の細沈線を２条巡らせる。内面は貝殻条痕文の後にナデが見られる。17は，２本１組に近い沈線文を鋸歯状若しくはＶ字状に施す。内面の剥落が激しい。報告書の179に類似する印象も受ける。

（４）小結

以上のように報告書分類を元にしつつ，現時点での型式変化の方向性に即して紹介してきた。結果，



第２図　各地の倉園Ｂ式土器



第３図　倉園Ｂ遺跡資料

16は報告書資料のいずれにも属さない可能性があり，改めて，倉園Ｂ遺跡のバリエーションの豊富さを実感した。なお，これらの資料が，どの時点での採取資料であるのか，現時点では明確にすることは出来なかった。いずれにせよ，倉園Ｂ遺跡は縄文時代早期において重要な遺跡である点は不変であり，東南九州の発掘調査資料が充実しつつある現在，再評価をするきっかけとなれば幸いである。

おわりに

志布志周辺に多くの遺跡が集中するのは，瀬戸口氏の地道な活動の範囲が志布志であり，率先した資料紹介を行ってきた実績によって遺跡地図が充実していったからに他ならない。氏の業績に改めて敬意を払うとともに，引き続き資料報告に取り組んでいきたい。

引用・参考文献

牛ノ浜修　長野眞一編（『倉園Ｂ遺跡・十文字遺跡』志布志町埋蔵文化財調査報告書（５），1983年）志布志町教育委員会

黒川忠広（「南九州縄文時代早期前葉の先駆性について」『第四紀研究41（４）』，2002年）第四紀研究会

黒川忠広（「瀬戸口望コレクションの紹介～志布志市坂之上遺跡～」『黎明館調査研究報告』第30集，2018年）鹿児島県歴史資料センター黎明館

志布志町教育委員会（『志布志の埋蔵文化財』，1985年）

新東晃一（「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』，1989年）小学館

瀬戸口望（「連穴土壙のもつ機能的性格について」『鹿児島考古』第15号，1987年）鹿児島県考古学会

瀬戸口望編（『倉園Ｂ遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（７），1984年）志布志町教育委員会

前迫亮一（「倉園Ｂ遺跡の再検討Ｉ」『南九州縄文通信』№７，1993年）南九州縄文研究会

番号	部位	文様・器面調整		色調		胎土								備考
		外面	内面	外面	内面	石英	長石	輝石	カクセン石	雲母	砂粒	小礫	その他	
1	口縁部	貝殻条痕文	貝殻条痕後ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	○	○	○						
2	口縁部	貝殻条痕文	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○							
3	口縁部	貝殻条痕文	貝殻条痕後ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○					○		
4	口縁部	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	黒茶褐色	茶褐色	○	○					○		
5	胴部	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	赤茶褐色	暗茶褐色	○	○							
6	底部	貝殻条痕文	ナデ	明茶褐色	茶褐色	○	○	○						
7	底部	貝殻条痕文	ナデ	茶褐色	茶褐色	○	○							
8	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	○	○					○		
9	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○		○					
10	口縁部付近	貝殻押引文	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○							
11	胴部	貝殻押引文	ナデ	黄褐色	黄褐色	○	○					○		
12	口縁部付近	貝殻刺突文	横位ナデ	灰黄茶褐色	黄茶褐色	○	○					○		
13	胴部	貝殻綾杉条痕文	ナデ	黄茶褐色	赤黄茶褐色	○	○					○		
14	口縁部	貝殻刺突文	やや強いケズリ	黄茶褐色	赤茶褐色	○	○		○			○		補修孔
15	胴部	貝殻刺突文	風化	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○					○		
16	口縁部	貝殻条痕文，沈線文	貝殻条痕後ナデ	黄茶褐色	灰黄茶褐色	○	○					○		
17	胴部	沈線文	剥落	赤茶褐色	暗赤茶褐色	○	○		○					

表１　遺物観察表

（くろかわ　ただひろ　本館学芸課専門員）